

発刊にあたって



兵庫県土木部長

志道 行雄

平成7年1月17日 午前5時46分に阪神・淡路地域を襲った「兵庫県南部地震」は、近代都市における直下型地震で、我が国における今世紀の地震災害としても、関東大震災に次ぐものであり、極めて甚大な被害をもたらしました。

兵庫県には多くの活断層があり、私はこの存在については、ダムやトンネル等の巨大土木構造物を建設する際の地質調査等で認識していました。しかし、今世紀末にあのような巨大な地震がこの地を襲うとは想像だにしていませんでした。

震災の直後、自宅から県庁まで歩いてきた途上、周囲のコンクリート建築物等の倒壊や、道路の地割れ、落橋、漂うガスの臭気に遭遇して、地震エネルギーのすさまじさに驚愕するとともに、兵庫県全体の被害を想像して、身体中が震撼したのが忘れられません。

そして、県庁にたどり着いたその時から今日まで、かつて経験したことのない大災害のなかで、その初期対応から復旧、復興に至るまで気の休まるまもなく必死の取り組みを行ってきました。

この大震災では、6,300名を越える尊い生命が奪われるとともに、20万棟に及ぶ家屋が倒壊・焼失し、30万人を越える人々が避難を余儀なくされました。

都市基盤については、道路、鉄道、港湾等の交通施設が壊滅的被害を受けたことにより、交通が完全に麻痺し各所で大渋滞が発生したため、交通対策を最優先とし、関係者と一丸となって早期復旧に取り組んできました。また、六甲山の山肌の亀裂や防災施設の破損等により、二次災害の恐れが生じるなど、一刻の猶予も許されない状況となったため、警戒避難体制の強化と砂防施設等の早期整備が急務と考え、「六甲山二次災害警戒対策本部」を設置するなど、防災対策を最重点に進めてきました。

これらの早期の取り組みや、現場での昼夜を問わない懸命の努力により、鉄道や高速道路、港湾等のインフラは驚異的な早さで復旧が進むとともに、六甲山系においてもその後の降雨による二次災害も発生していない状況にあります。

このたび、震災2周年を迎えるにあたり、復旧事業も順調に進みほぼ震災前の状況に戻りつつあるなか、阪神・淡路大震災の貴重な経験を、後世に伝えていくことが土木技術者としての責務であり、また、物心両面にわたって心暖まるご支援をいただいた全国の多くの方々へのご恩返しでもあると考え、記録誌を作成することといたしました。

この記録誌には、我々が遭遇した地震の状況や被害状況、そこから立ち直っていく様々な動きをつぶさに記録しておりますので、災害発生時の緊急対応に際しての有益な参考資料となるものと確信いたしております。末永くご愛蔵いただきご活用いただければ、これに勝る幸せはありません。

平成9年1月